「戦中派ゴルファーの独り言」

ハンディ委員長
吉村　喜代造

太平洋戦争が終わって反半世紀以上経って今さら「戦中派」でもないが、風化されつつあるその言葉の中に、私は何時も何か大きな鼓動を感じる。

私にとって、「戦中派」とは、あの戦争の時代に、青春期を送った大正生まれの世代の人間のことを指している。何年間も戦争にかり出された者たちは、同じような肌合いを持ち、お互いに、それとなく解る共通の「におい」を持っているような気がする。

橋本カントリークラブにも 214 名の大正生まれの会員がおられるが、その殆どの方が、いわゆる純粋な「戦中派」である。個人の人格形成が行われる青春時代に世界大戦という異常な経験をした世代は、現在生きている日本人の中では他に類例がない。

戦前戦中の社会環境と、復員し、焼け野原と化した日本で社会人として歩み始めた戦後の社会環境との間には、あまりにも大きなギャップ落差があった。戦前戦中には「鬼畜」だった米英が、戦後は民主主義の先生となり、「現人神」だった天皇は、一私人になった。その他の様々な事が、180 度変わってしまう大転換が、我々の目の前で、身の回りで実際に起こったのだ。

「これだ」と信じていたものが、ガラガラと崩壊していく。そういう価値観の大転換を、青春期と壮年期の、みずみずしい感性を持った時期に経験した例は、日本では明治維新を生きた若者ぐらいではなかったろうか。

「戦中派」は青年時に叩き込まれた「滅私奉公の精神」で戦後日本社会の尖兵となって、がむしゃらに働いた。働かざるを得なかった。戦前の精神至上主義的思潮の中で成人した「戦中派」が経済至上主義的、あるいは物質万能主義的な戦後の発展の担い手となったのは、真に皮肉な現象だった。

今や、その「戦中派」も喜寿から傘寿を迎える歳になり、その活力の源泉であった精神的弾力性や現実調整能力も、失速しつつある。もう、これ以上心身共に無理はできない。ゴルフ仲間の青壮年の中に入り、プレーすることによって一番気が休まるという境地に達している。

確かに「戦中派」は老化も進んでいる。が、それゆえにこそ、激動期を耐え抜いた体力気力を更に充実させ、常識や作法を見失った虚しい社会を離れ清浄の気をもって、力強いプレーをしたいと願っている。

人は信念と共に若く
　　疑感と共に老いる
人は自信と共に若く
　　恐怖とともに老いる
希望ある限り若く
　　失望と共に老い朽ちる

そういう賢人の詩がいつも脳裏を吹きすぎている。